

ぐけいじいなり 愚溪寺稲荷古墳

【所在地】岐阜県可児郡御嵩町中

【築造時期】7世紀前半頃

周辺古墳群 愚溪寺稲荷古墳がある御嵩町中地区は、上之郷・御嵩・中・伏見の4地区から構成される町の中央部に位置する。町の東西には北側と南側を分けるように流れる可児川があり、その北側には宝塚古墳（5世紀初頭）をはじめ天神ヶ森古墳（5世紀末～6世紀初頭）などの有力首長層の古墳を中心に古墳群が形成される一方、南側では古屋敷地区の池西古墳などの古墳が点在する。

愚溪寺稲荷古墳は可児川以北に位置し、標高約150mの丘陵斜面に築造され、現在は愚溪寺境内にあって管理されている。早くから墳丘や石室内に稲荷社が祀ら、信仰の対象にもなっている。



1 宝塚古墳 2 若宮神社古墳群 3 長岡墓地古墳群 4 中切古墳
5 池西古墳 6 城町1号墳 7 妙土古墳 A 真名田古墳 B 天神ヶ森古墳
C 赤坂古墳 (A～Cは消滅墳)

墳丘の特徴 古墳の築造にあたっては、丘陵斜面を削平し、平坦面をつくるなどして墳丘を整え、石室を設けている。古墳の南側からみると墳丘は北側よりも高く見え、斜面を活かした二段築成の構造を備えている。また墳丘両側の側面には背面にかけて馬蹄形状にめぐる深い掘り込みが確認できる。おそらくこれは古墳築造の際に必要な盛り土の確保や墳丘の整形とも関係があると考えられるが、古墳を丘陵斜面から区画しようとする意図的な造作とみることもでき、愚溪寺稲荷古墳の特徴の一つでもある。

図1 古墳群位置図

さらに測量図からは墳頂部付近に隅角が認められ、墳丘西側の等高線が直線的になることや現地にもみる葺石の状況からみて、古墳は東西約20m、南北約18mのやや不整形な方墳とみなすことは十分可能である。現在古墳の墳頂部には稲荷社の祠が、背後には道路、側面にも階段が設けられるなどの改変が著しいものの、墳丘の形状や構造をよく伝える終末期古墳である。

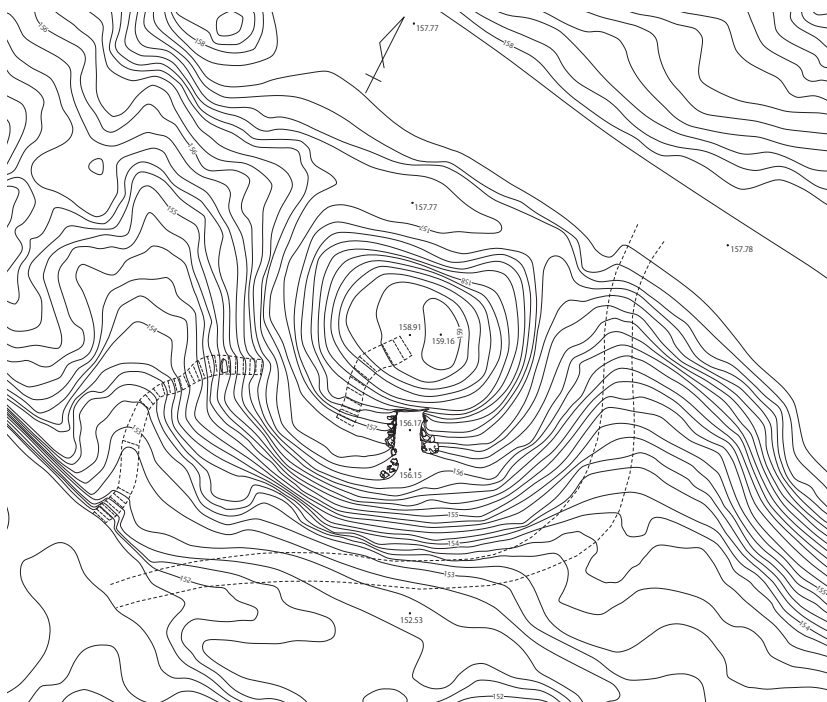


図2 墳丘図 (S=1/400)



古墳の現状 (上：墳丘 下：石室入口)

横穴式石室 石室は両袖式石室で南東方向に開口する。開口部の平坦部に羨道から続く石材を確認できるものの、改変を受けていて前庭部については不明である。

玄室の平面形は長方形で長さ 4.0 m、最大幅 1.7 m、高さは現状で 1.4 m である。流入土により玄室と羨道は埋まっている。玄室の奥壁には鏡石を、玄門部には立柱石を置き、一段低くなる楣石を支える。側壁にも巨石を使用するが、左側壁にはひときわ大きい石材を使用している。

羨道は右側壁には巨石を使用するが、左側壁には横方向に石材を積む方法がとられ、左右で側壁の積み方が異なる。玄室・羨道の側壁はきれいに面がそろそろように、石材を平滑に仕上げ積んでいる。天井石は玄室に 3 枚、羨道に 1 枚架けられているが、羨道にはもう 1 枚あったと考えられる。石材は奥壁や袖石、楣石と天井石には花崗岩を、側壁にチャートを使用するなど、場所を使い分けしている。



石室内部（玄門より）



石室内部（奥壁より）

古墳の意義

今回の測量によって愚溪寺稻荷古墳はこれまで考えられてきた円墳ではなく、約 20m × 18 m の二段築成とみることができると考えられる大型方墳の可能性が高まった。その墳形や規模、葺石や段築などの情報については今後さらなる調査が求められるものの、築造時期が横穴式石室の特徴から 7 世紀前半頃と推定され、御嵩町内の代表的な終末期古墳と位置づけられる。

またこの地は約 600 m ほど南に古代寺院の願興寺廃寺が位置する。寺院建立の造営時期も問題となるなか、愚溪寺稻荷古墳との関係はさらに注目されることである。

愚溪寺稻荷古墳に代表される大型方墳や坂本天神山古墳などの大型円墳は、交通の要衝にある御嵩地域の 7 世紀史を考える上で極めて重要な古墳と評価できる。今回の古墳調査により御嵩地域の歴史的重要性が一層高まったといえる。

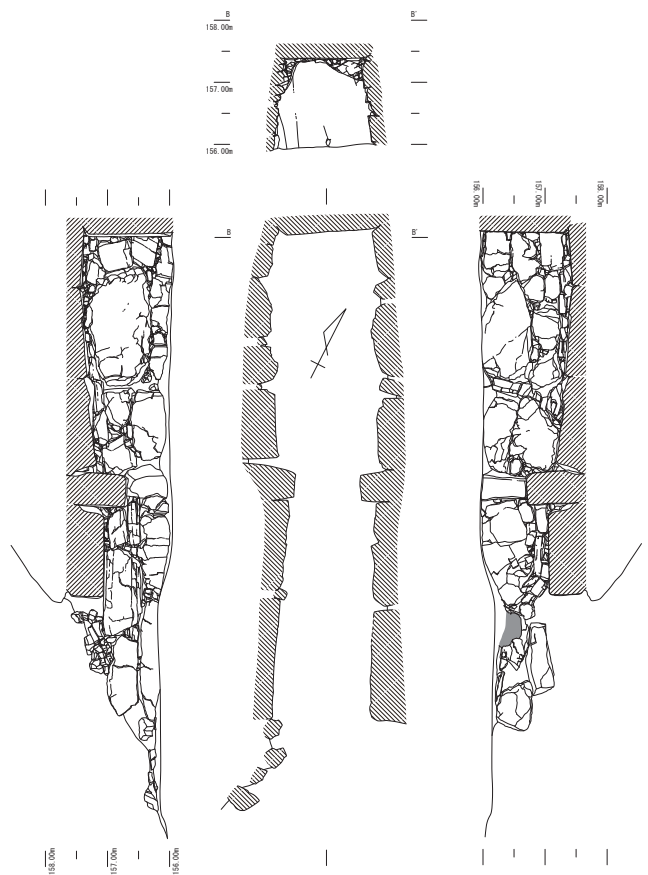


図3 石室図 (S=1/250)

【参考文献】 御嵩町 1992『御嵩町史 通史編上』

